



3 回目となったセンターまつり。雨男(女)は誰だ? ! と言いたくなるような毎年の雨。しかし、そこはセンターまつり実行委員会。拔かりなく用意万端整えていた雨の日用プログラムへすばやく切り換え、滞りなくにぎやかに開催されました。

恒例になった「ブッチーナ」の高らかなファンファーレで幕を開け、日頃の市民活動の発表、展示の場として、たくさんの登録団体の方々が参加しました。フリーマーケットや食パザー、子ども遊びコーナー、スタンプラリー、そして多くの賞品が用意されたお楽しみ抽選会などなど、遊びどころも満載のにぎやかな一日となりました。このセンターまつりが広く市民の皆さんに浸透し、市民活動に理解、協力していただけるよう、毎年開催されることを期待しています。

センターまつり

2009. 3. 22 (sun)



つどい



ネットワーク・現在の状況
(平成21年3月末日現在)
登録団体113 団体

*** お問い合わせ先 ***

甘日市市民活動センター
甘日市市住吉2丁目2-16
TEL 0829-32-3741
FAX 0829-32-3742
HPアドレス: <http://www.hainet.jp/>

市民活動情報紙 - さくらdeファミリー

甘日市市民活動センター
平成21年春号
Vol. 7

運営協議会トピックス

クリスマスコンサート 2008/12/21

「白いピアノ」の物語」が行われました。

当センター2階の第1研修室で、ピアノを使用したコンサートが行われました。このコンサートは白いピアノを中心として、様々な音楽団体の皆さんが、広く市民の皆さんに音楽を楽しんでもらおうと企画されました。はつかいち市民ミュージカル・青少年夢プラン実行委員会のミュージック・シュトラセン(バンド活動)・甘日市吹奏楽教室の演奏がありました。また、白いピアノを提供してくださった柄澤恵子さんと教え子の篠原加代子さんも参加されました。岡山市から駆けつけた篠原さんは、幼い頃事故で親指を失くしました。その苦境を乗り越え音楽を諦めないで続けた経験談を交えながら、演奏する前向きな姿勢と楽しさを伝えました。会場入り口では青少年育成甘日市市民会議と運営協議会所属団体有志による軽食と飲み物の販売があり、飲食しながらコンサートが楽しめるイベントとなりました。



センターからのお知らせ

- 日曜使用の予約が変更になっています。
従来は2ヶ月前の同じ日から予約が行われていましたが、2ヶ月前の末日までに予約をすれば使用できるようになりました。
- センター登録団体の更新手続き書類の提出は3月末日が締め切りとなっていましたが、まだ提出されていない団体の方はお早めに提出してください。

センターにサフサハラから視察団



JICA(国際協力機構)研修サフサハラ・アフリカ地域「平和構築としてのガバナンス能力強化」コースの一端でセンターが視察を受けました。視察のテーマは「地域と行政との連携・協働・安心・安全なまちづくり」についてでした。対応は地域協働課の藤井さんが行いました。英語で挨拶をし、その後同時通訳の元でテーマについてセンターの施設案内をしました。このセンターの視察に来られた団体は多くありますが、一番適いところからの視察のお客様となりました。

2階に小会議室が加わりました。

4月1日から2階にネットワーク登録団体専用の貸室が新たに加わりました。机×6・イス(パイプ)×22・ホワイトボード×1・定員22名となっています。貸室手続きは1階会議室やミーティングルームと同様で3ヶ月前から予約可能。1階会議室やミーティングルームと扱いが同様で、1階受付で申し込み者が直接予約簿ファイルに記入すれば、利用できます。



しりあっChaO



宮島大鳥居の下で行われるとんどは
みやびな雰囲気満点！

◆◆宮島地域◆◆

1月14日の早朝、宮島にて「とんど」がありました。場所は、厳島神社と長浜神社の干潮時の浜で行われ、潮の満引き（みちひき）によって毎年始める時間が変わり、今年は午前6時30分からと、かなり早い時間となりました。「今日は寒いね〜」、「今年はええ年になるかのお」、「あけましておめでとう」。至る所から住民が集まり、さながら大きな井戸端会議状態。夜が明けていく中、燃え盛る炎はとても美しく、厳島神社でとんどをするとても贅沢な瞬間だなと、改めて実感する日になりました。

宮島地域特派員：菊池寛

◆◆大野地域◆◆

パンとものすごく大きな音が響き渡わたる。青竹が爆ぜる音とわかっていながらも驚いてしまう。この大野浜地区のせまい地域の中でも、とんどは6カ所に分れて行われています。14時に恵方から点火するのがほとんどですが、永慶寺川内で行われるとんどは、潮の満ちひきで行われるため、時間は決まっていません。今回は、浜地区でも上の浜集会所裏の公園のとんどを紹介します。当日の朝、疫神社の海側から竹を切りだします。（赤い鳥居が見えます。）中心に竹を1本立て、周りに12本の竹を立てて組み今年の恵方から点火します。残り火でカキや餅（ぜんざい）を焼いて食べたり、竹酒を飲んだりします。字が上手になるようにと、書き初めを燃やしたりもします。また、「家族みんなが、健康に過ごせますように。」と、鏡餅を焼いて持って帰ります。16時頃までにはそれぞれ三々五々に帰宅しますが、次の日に獅子舞が行われるので「また明日」が挨拶となります。やり方や内容はいろいろとありますが、どの地区も自分のところのとんどが1番だと思っています。

大野地域特派員：松本妙子



旬の食材・牡蠣！
産地ならではの大量振る舞い

◆◆佐方地区(廿日市地域)◆◆

廿日市佐方で10日小正月恒例の「とんど祭り」が佐方小学校グラウンドで行われた。佐方では、これまで、とんど祭りには格好の場所であった、ゲートボール場や市民農園・子どもの遊び場として広く使われていた洞雲寺前広場で行われてきたが、JR廿日市駅裏再開発事業が本格化してきた今年は、地域に適切な会場がなく、市域のとんど祭りとしては珍しく小学校のグラウンドに会場を移して行われた。



潮の干満で点火時間が変わる
永慶寺川の中州で行われるとんど

世界同時不況といわれ景気低迷が続く昨今、家内安全とともに商売繁盛・景気回復を祈願する人も多かったと思われるが、佐方アイラブ自治会コミュニティ事業局文化部を中心に、伝統文化の継承・地域貢献の一環として多くの地域住民が参加して盛大に行われた。燃え盛る炎に願いを込めて竹にはさんだ餅を焼く親子・家族の姿が多く見られたとんど祭りであった。

佐方地区特派員：齋藤正美

「とんど」は小正月（1月15日）に河原や空地などで行われた火祭りの一種で、正月の神が御座（山）に帰る行事と考えられています。かつては1月14日に飾り付けをし、15日の夕方火がつけられるのが慣わしでした。火にあたると若返るとか、餅を焼いて食べると病気をしないと、書き初めをかざしてそれが高く舞い上がると字が上手になるなどと言われています。



大きな炎の吹き上がる阿品台二丁目地区

◆◆佐伯地域◆◆

地域社会の数ある年間行事の中で、重要なのはやはり年初に行われる「とんど」であろう。古くからの行事も最近では少子化高齢化が進み、合わせて町の都市化、自治会の再編などでなかなか「とんど」そのものが出来ない地区もある。そんな中で佐伯花上地区では1月11日に行われた。役割分担、費用の負担、後片付け等など今後維持していく事が難しくなる行事を老若男女が協力の下、次世代へ受け渡すよう地区の方々が見て取れる。苦労も色々あるらしい。年中行事を通じて地域社会が連携を図り、より良い町づくりを考える。その責任も重い。より多くの参加者を確保するため、屋台を用意、その食べ物の引換券を配布したり試行錯誤を繰り返し、現在の様な行事になったようである。当日は薄っすらと雪化粧、早朝からの準備も風過ぎには整い、午後5時点火、昨年来の不景気風もなんのその、赤々と夜空を焦がし、年頭の願いを込めて燃えあがった。

佐伯地域特派員：山田耕造 写真提供：花上自治会



小学校のグラウンドで行われた佐方地区



とんどの醍醐味・竹酒

◆◆吉和地域◆◆

今年の冬は「よしわ灯かりロード」

今年の冬は天候にいたすらされ、冬の行事をやむなく中止することとなった。吉和名物大とんどまつりは、降雪続きで竹集めが困難なため中止。1ヶ月後の雪のカンテラづくりは、雪不足のため中止。でも雪灯かりのため用意していた200本余りの竹のカンテラを親水広場付近に並べ、お菓子まきなどをして冬の夕暮れを地元の子もたちと一緒に楽しんだ。来年こそは、雪のカンテラが並び先に燃え上がる大とんどが見られますようにと期待する。

吉和地域特派員：能島美緒

◆◆宮内地区(廿日市地域)◆◆

昭和の初めころまでは田んぼをはさんで向こう3軒両隣の家族での小さなとんどが、あちらこちらでみられたそうす。



おき火で餅を焼き無病息災を願う

「昭和30年代からかのオ、宮内小学校の校庭でいっぺん、大きいのをやったよのオ。」この頃から宮内は住宅が増え始め、道路の整備も進み、ご近所単位だったとんどは、子供会や町内会を単位に、大きなとんどへと変わっていったそうです。竹を3〜4本立てにして、てっぺんをしっかりとくる。時計回りに50本以上の孟宗竹を使い、円錐状にやぐらを組んでいく、高さは20メートルもあろうか……。竹を縛る時、針金などは使わない。焼け残って農作業の時に危険だという。使うのは、何メートルもある蔓（カスラ）。太いものでは直径5センチのものもある。組みあがった竹のやぐらを裾から見上げると、茂った青い竹の葉でてっぺんが見えない。冬の空に天高くそびえたった青い葉は、今の不景気をどこかにふきとばそうかといった勢いを感じる。的場地区では、始まる前にお神酒を撒き氏子さんがご祈禱する場面もみられます。廿日市で一番初めにできた団地として有名な峰高団地では、田んぼがないため公園の真ん中に立派なやぐらを見事に組み上げていた。周りはもちろん住宅がぐらりと囲んでいる。引火してはいけないと、始まる前に公園の中の植え込みにホースでしっかり水を撒き、焼け残った灰を入れるための直径3メートルもある大きな穴を掘っておきます。地域によっては後継者に頭を悩ますところもあるようですが、「何年もとんどに行かなかったけど、子どもが子ども会に入り、一緒に参加したのがきっかけで毎年参加するようになった」というお父さんも……。今年はお父さんまで10カ所ほどあるかどうかといったところでしょうか。これからたんぼも減りとんどの行事が難しくなっていくことも予想されますが、様々な工夫をして、冬の風物詩でもあるとんどを残していってほしいものですね。

宮内地区特派員：山崎信美

ほんのりとした灯りに
よしの灯かりロード



小学校の屋根から落ちた雪を運んで何とか作り上げた雪のかまくら。市民有志と観光協会のスタッフの努力の賜物です。竹をくりぬいて作った灯籠は吉岡利賀夫さんの作品。200本の竹灯籠で路を飾りました。灯りが点ると幻想的な雰囲気になり、イベントも盛り上がりしました。

